



June 2014

高等教育推進機構

アカデミック・サポートセンターニュース

Academic Support Center News

Vol. 12

本紙第12号では、2014年度第一学期始めの学習支援と進路・修学相談の状況のまとめをお伝えします

2014年度春 過去最多の利用者

総合入試に移行し4年目の新入生を迎えたこの春、かつてない程多くの学生がASCを訪れた。初めて時間割を組み立てる一年生の履修相談が多いこの時期だが、昨年度4月の延べ利用者274人に対し、今年の4月は506人と前年度を大きく上回った。今年の新入生が積極的なのか、あるいは、これまでASCにあった“入りづらい”というイメージが払拭されてきたのかも知れない。今年度からスタッフが6人体制から4人体制となり、混雑時には相談者が順番待ちをする場面も見られたが、相談対応についてのアンケートからは学生からの高い満足度がうかがえた。

学習サポートも連日賑わっている。特に物理や化学、実験レポートの書き方についての質問が目立ち、平常時で例年の試験



学習サポート室の様子(5/1)

期並みの利用がある。延べ利用者数は、昨年度4・5月で450人に対し、今年は759人に上った。

学習サポートの他にも、少人数のセミナーの「アカサポセミナー」を開催するなど、様々な学習支援が精力的に行われた。詳細は以下の通りである。

一年生に学習の基本技術を伝えるスタディスキルセミナーでは、「ノートの取り方」「実験レポートの書き方」「講義レポートの書き方」についての解説が行われた。学習サポートでも質問が

多く見られるように、この時期は自然科学実験のレポートの書き方を習得するのが急務なのである(理系学生の半数が一学期に自然科学実験を受講する)。

物理ゼミ(物理学初級ゼミから改称)では、高校物理未履修を対象とし、基礎力の養成を図る。第1回「大学の物理とは?」では、Processingというビジュアルデザインに特化したプログラミング言語を用いて物体の運動の様子をスライドに映しながら、物理に微積分が導入される理由を解説した。



数学ゼミの様子(5/22 左上は船川さん) 積分が導入される理由を解説した。

留学生チューターを囲んで英会話をする英語コミュニケーションも昨年同様、開催されている。TOEFLのリスニング対策も行われており、常連となっている学生も少なくない。

今年度からの新企画として数学ゼミが試行開講された。例年中間試験前に質問が集中する「線形代数学」と「微分積分学」の重要ポイントについて、演習形式のセミナーを全4回の内容で行った。講師は、普段は学習サポートの数学を担当している大学院生チューターの和田和幸さんと船川大樹さん(どちらも博士課程2年生)が担当した。ベテランチューターによる要点を付いた丁寧な解説が好評だったようだ。

スタッフの心象 第5回「受け身な人ほど不満を言う」

このコーナーではアカサポに寄せられる進路・修学・学習相談の内容を元に、相談現場の様子をお伝えします。

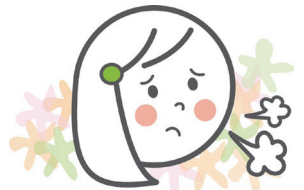
ある宿泊施設の浴場にて。「風呂の気持ち良さは受け身だから嫌いだ。」知人はこう言いながら、入って5分も経たず、サッサとお湯から出て行った。それを聞いて、自分はなんて受け身な人間なのだろうと、しばらく思い悩んだ思い出がある(今思えば、知人は単にお風呂が苦手だったのかも知れない)。

理系基礎科目のサポート授業のようなものを担当し、分かりやすさに自分なりに気を使っているのだが、それでも授業後アンケートに、「〜〜が分かりにくかった」とか「もっと〜〜してほしい」とある。もちろん自分にも非があるだろうし、これから改善していきたい。

しかし、なぜその場で質問・要望をしないのか、とってしまう。正規の授業ならば、学生も多いし、確かに質問づらい。し

かし、こちらは教室に10人も居ないのだ。アンケートに「〜〜が分からなかった」と書いて、授業後にその点について質問に来る学生もいる。これなら健全だ。だが一方で、「あの問題が分からなかった」とだけ書いて帰る人もいる。「あの問題」とはどの問題なのだろうか。素直な感想を述べているだけなのかも知れないが、質問もせず不満を書くのはいかがなものか。

つらつらと受け身な学生への不満を述べてしまったが、要するに、受け身な人ほど不満を言うのだろう。能動的な人は不満を言わない。自分でその状況を変えるからである。



アカサポ・コラムはASCスタッフの声をお届けします。第8回は、今年度からアドバイザーに就任した森先生のコラムです。

「一歩も二歩も前へ前へ」

もり みちつぐ
森 治嗣 アカデミック・アドバイザー、工学研究院教授

今年度アカデミック・アドバイザーを拝命した、工学研究院エネルギー環境システム部門の森治嗣です。アカデミック・アドバイザーというよりはライフ・アドバイザーかカウンセラーの方が向いていると自分では密かに思っているので、どのくらいお役に立てるかは自分でも未知数です。自己紹介をすれば長くなりますが、簡単に言えば北大に来てまだ3年目、その前は短期ではありましたが、東京の国立大と私大で非常勤講師と客員教授をやり、更にその前は電力の研究所に20年程在籍しておりました。昔になりましたが、電力の前は1987年から1989年にかけて、米国マサチューセッツ工科大学(MIT)で客員研究員として公私ともに充実した人生を過ごしました。その記憶はボストン、イエローストーン、カナディアンロッキー、グランドキャニオン、プリンスエドワード島などの美しい風景とともに鮮明に残っています。MITの前は大学で博士号を取得して直ぐIHIで原子力開発研究部門で新型炉の開発研究に従事しました。メーカーとユーティリテ

ィ、国内外の大学、私大と国立大、日本と米国での生活と、対比する世界を経験したことは私の人生を変え成長させました。この2年間専攻の就職担当も仰せつかっておりますが、これらの経験はとても役に立っています。人生の歩む道を変える時は決断が必要です。幸運の女神には前髪しかなく後ろ髪は無いと言う諺があります。幸運のチャンスは通り過ぎたら掴めない、幸運を掴むためには不断の努力という準備が必要です。それも一歩も二歩も前へ出て自らの成長を促しその機会を得なければなりません。

そう言う経験から私の研究室は学生達には可能な限り機会を与えるようにしています。海外経験を目指す院生と学部生で溢れる研究室は、修士1年生で夏から秋にかけて米国の大学にインターンに行く決まりです。工学系では世界最高峰のMITをはじめトップテンに入るペンシルバニア州立大学やイ

ンディアナ州立パーデュー大学などへ、学生達の希望に合わせて送り込んでいます。このインターンが初めての海外経験という学生もたくさんいます。渡米する前は不安そうな表情でいっぱいの子供たちも、渡米して2週間もたつと学生から元気なメールが届いてきます。そして帰国予定の週になると米国大学生生活が楽しくて帰りたくないというメールが届きます。わずかな期間でも米国の大学生活に刺激された学生達は例外なく大きなものを掴んで帰学し、その後もモチベーションを持ち続け国際感覚にあふれた研究室を盛り上げ続けています。これらの経験と好事例をもとにアカデミック・アドバイザーとしていくらかお役に立ちたいと思います。



米国大学インターン先のペナントをもって自慢話が盛り上がる学生と研究室
左上はイタリアの火力発電所で実験時の森教授

編集後記

今後も様々な企画を展開します

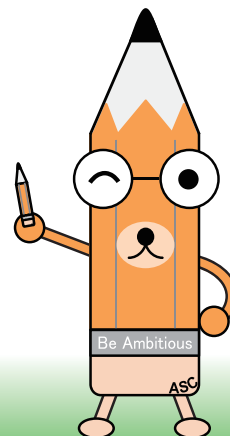
6月に入り札幌も夏らしくなってきましたが、アカサポも暑さに負けず様々な企画を行います。他の学生支援組織との連携企画も予定しております。詳細は、アカサポのウェブサイト等をご覧ください。今後とも皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

今後のアカサポ関連イベントの一例

- 英語コミュニケーション：留学生TAとの英会話を週2回開催中。
- 連続スキルアップセミナー：附属図書館連携の学習スキルに関するセミナー。

アカデミック・サポートセンター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
電話：011-706-7526 E-mail: asc@high.hokudai.ac.jp
北海道大学高等教育推進機構2階 URL: http://asc.hokudai.ac.jp/



次号は9月発行予定です